

脱原発のローカルな取り組み in 練馬

～黄色づくしの練馬テンポで、地元で溶け込む“普段着”活動～

東京の練馬区は夏になると猛暑のポイントとして全国的に報道されますが、実はまだまだ農地が残る、のどかな街です。人口は毎年増えてたていま 73 万人（島根県より多い）、区立小学校は 62 校、駅は 21 駅あります。戦後急速に宅地開発されたので、その不便を解消するために起きた住民のさまざまな運動が、いまでも草の根で続いています。ずいぶん前から、市民の手による太陽光発電所もありました。

3・11 以降、市民が自主的、散発的に、デモや宣伝行動、放射線量の測定、学習会や映画会などをおこないました。そこに、若い親たちが必死な思いで加わり、給食への福島産米の使用中止をもとめるなど、原発なくそう、子どもを守ろうの運動が、さまざまな形で広がりました。

2011 年 11 月には、既存団体が協力して脱原発デモを開催。ツイッターでの発信に、団体の動員を大きく超える個人参加者があり、主催者も参加者もびっくり。SNS は、デモや集会がなくても日常的に交流するツールです。ツイッターを見てデモに参加した人が、現場で生の人間同士としてつながって、さらに日常的にツイッターで交流する、まさにネット（網）のように人がつながっていく様子が目に見えるようでした。

このころから、いくつもの小さな団体ができ、小回りきく独自のイベントをおこなうと同時に、横の連携をとりあい、大きなイベントにも協力しあう形ができてきました。

2012 年 3 月には 100 人以上がチラシに名前を出して、「さよなら原発ねりまアクション旬間」を実施。映画会や集会、デモなどの連続イベントのほか、練馬オリジナルの脱原発グッズを作り、練馬区内を「脱原発の黄色」で埋めよう！という取り組みが盛り上がりました。これはその後も、規模は縮小していますが、毎年 3 月に続いています。また、この取り組みが母体になって、原発稼働が再びゼロになった 2014 年 9 月から、毎月 11 日に駅前宣伝行動を続けています。



黄色い「脱原発メロンパン」
(2014 年 3 月アクション旬間)

初めて出会う人たちの「化学反応」は予想を超え、アイデアと行動力は目をみはりました。ある人は首都圏の脱原発デモの写真を撮りまくって写真展を開き、また、友人同士が呼びか

けあって原発稼働ゼロになった5月5日には駅前広場でキャンドルをともして原発を考えるつどいをおこない、あるときは有志で空き店舗を借りて七夕に「ささのはさらさら さよなら原発」という子どもまつりのようなイベントを開き、また、放射能問題を考えるママたちのグループはお茶会を続け、ある団体は「日本と原発」の上映会をおこなって1000人を集める、などなど、いつもどこかで原発なくそうの取り組みが続けられているのが練馬です。

原発ゼロの日・こどもの日
練馬駅前にて
(2012年5月5日)



また、練馬の「伝統」になりつつあるのが、首都圏反原発連合などの団体が全国規模の大きな集会やデモを開催する日に合わせて、地域でデモをすることです。すでに9回になりました。思いはあっても、さまざまな事情で全国行動には参加できない人がたくさんいます。そういう方たちも地域でのデモには参加できます。毎回、車いすの方や、高齢のご夫妻、子ども連れが参加（もちろん元気な人も参加します）、足が悪いからと出発集会に参加し、デモを見送ってくださるのが恒例になっている方もおり、とても歓迎されています。

そういう普段着のデモは、コールも工夫します。官邸前のような激しいコールではなく、ゆっくりと練馬テンポで(笑)、なるべく批判ではなくポジティブな言葉を選んで。黄色い風船やプラカードは必須アイテムです。

こうした運動の継続の力は、けっして忘れられないあの日の恐怖です。この世の終わりかと思うほどの揺れ、テレビが映し出す津波の被害、原発から煙が噴き出すおそろしい光景、子どもの遊び場で測定される異常な放射線量。そして私たちは知りました。あの原発の電気を使っていたのは、福島の人たちではない、私たち東京の人間だということ。原発事故とその後の福島の人たちの被害は、私たちにとって他人事にはできないのです。



原発なくすまで、ゆるく、ちからづよく、楽しく、あきらめないで運動をつづけていきます。

(文責 こうさかゆきえ) 2017年8月7日公開